

都鳥異聞 — 『我身にたどる姫君』の『伊勢物語』理解 —

梶 山 柚 輝

—

「都鳥」といえばまず想起されるのは、『伊勢物語』第九段のすみだ河での場面であろう。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり。それをすみだ河といふ。その河のほとりにむれるて、思ひやれば、かぎりなく遠くも来にけるかな、とわびあへるに、渡守、「はや船に乗れ、日も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の、はしとあしと赤き、鳴の大ききなる、水の上に遊びつつ魚を食ふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、

名にしおはばいざ言問はむみやこどりわが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

（『伊勢物語』第九段 一二二〜一二三頁）⁽¹⁾

京から東国へと下った男とその一行は、すみだ河へと辿り着く。その河を渡ろうとする漂泊者たちが、都に残してき

た人への思いを馳せている折に、都鳥は登場する。彼らの故郷「都」を名に冠したその鳥は郷愁の念を誘い、男は、都にいる愛しい人の安否を都鳥に尋ねる歌を詠む。

『伊勢物語』第九段のすみだ河の場面において、都鳥は重要な役割を果たしているといえよう。ところで、この都鳥は、どのような意味合いを持つ存在として理解されてきたのであろうか。

古注釈書を繙くと、例えば『伊勢物語惟清抄』は、「我古郷ノ名ニテ、一シホ、ナツカシク思ヘリ。名ニシオフ事ナラハ、都ノ事ヲ問ヘシ。我思フ人ハ、アリヤ、ナシヤト。都ト云名ヲ、カコチテヨメル也。」⁽²⁾と示し、『伊勢物語古意』は、「此鳥名に負たる如くならば、都の事をもしりなん。いざや、わがおほつかなくおもふ消息を問んと也。」⁽³⁾と示している。「都鳥」は、その名から都を偲び、都にいる人の消息を尋ねる存在として解されていることがわかる。

現代の諸注釈書を参照しても、『伊勢物語評解』は、「この鳥が「都」を冠した名であることから、都人である男たちに都への郷愁をかきたてる。」⁽⁴⁾、「名に負ふ」は、その名を持つ意。都鳥に呼びかける歌で、京の「わが思ふ人」が無事かどうかを問う⁽⁵⁾と記し、『新日本古典文学大系』は、「渡守によって都の名を冠した鳥であることを教えられ、「京に思ふ人なきにしもあらず」とあった男は、「名にし負はば…」の歌をよまずにはいられない。」⁽⁶⁾と記している。

「都鳥」は古来、都を偲ぶ名を持ち、都にいる人の安否を問う存在だとして、一般的に解釈されてきた。『伊勢物語』第九段の原文に即した理解がなされてきたといえるだろう。

二

『伊勢物語』第九段で有名な都鳥だが、鎌倉時代中期に成立したとされる『我身にたどる姫君』⁽⁷⁾にも登場する。

ところがその都鳥は、前章で見た『伊勢物語』の都鳥とは趣を異にしているようだ。『我身にたどる姫君』には、「都

鳥」の用例が、巻二に一例、巻五に二例、巻八に一例の、計四例ある。

最初の一例は、中納言が対の屋の姫に仕える女房侍従と語らい、そのまま一夜を共にする場面にある。

(中納言は) れいのたいのひめ君の御方にたちよりて、侍従の君さそひいで、わたどの、とぐちに、又よしなきながめをし給ふ。……あと行ゑなきむかしがたり(〓行方不明になってしまった音羽の里の姫の思い出話)をぞし給ふ。……(中納言は) たゞならずひきみだし給ふに、ものこそよくいひつゞくれ、よなれぬ心には、いとわびしとおもへるも、にく、はあらざるべし。「猶なへだて給そよ。あさからずは、おほししるべき物を」とのたまふも、いとほづかしきに、かほひきいれて、

うかりけるあさきちぎりを思ふとてあとなきみちはいかゞをしへん

いひまぎらはすも、心づきなきまではなきにや、

ゆきまどふあとなきみちのしるべしてちぎりはあさきものかともみよ

やうくあけ行けはひに、つねにめなれぬるみやこどりなれど、けさしもはづかしうて、いといたうげざやかにもてなせど、まして女の心はた、いみじうぞわびしきや。〔我身にたどる姫君〕巻二 四五―四六頁⁸⁾

中納言は、侍従に音羽の里の姫の思い出話をしているうちに感情を抑えられなくなってしまう。侍従は、音羽の里の姫の行方は教えることができないと歌を詠みかけ、中納言は、音羽の里の姫のもとへと「しるべ」つまり手引きをしてほしいと歌を返す。そして二人は一夜を共にし、いつもは何ともない相手であるのに逢瀬後の今朝に限っては気恥ずかしくなった中納言は、「つねにめなれぬるみやこどり」すなわち普段から見慣れている女房の侍従に対して他人行儀に振る舞う。この場面の「都鳥」は、女房の侍従を指している。

この①について、現在までに公刊されている三つの注釈書を見ると、次のように記している。

・「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人ありやしやと」(伊勢物語・古今・羈旅・在原業平)による。侍従の君は古歌に歌われているように音羽の姫君の存否を問う人であるが、古歌に反していつも見慣れている人ではあるけれども、の意。

(徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』 一一一頁)⁽¹⁰⁾

・「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人ありやしやと」(伊勢物語九段・古今集九、羈旅、業平)に拠る。我身姫(音羽の里の姫のこと。稿者注)の行方を尋ねる相手なのでこういった。同じ用語が『とりかへばや』にも見える。

(今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君2』 五三三頁)⁽¹¹⁾

・「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人ありやしやと」(伊勢物語・九段)。

(大槻修・大槻福子校訂・訳『中世王朝物語全集20 我身にたどる姫君 上』 一〇一頁)⁽¹²⁾

どの注釈書も、当該場面の「都鳥」の典拠として『伊勢物語』第九段の「名にしおはば」の歌を引いている。『我身にたどる姫君物語全註解』は、「都鳥」は恋しい人の「存否を問う人」、今井源衛・春秋会は、恋しい人の「行方を尋ねる相手」だと述べており、原拠『伊勢物語』第九段の「都鳥」の意味、すなわち都の愛しい相手の安否を尋ねるものと同義に解している。

続く二例は、麗景殿女御とその密通相手の左大将について記された場面にある。

いふかひなきほそどの、こゝろづくしも、たえまひさしからず、おなじ心なりけるを、……(麗景殿女御は)いみじうつれなくのみおひなり給へるを、(左大将は)さすがに、わすれがたくきこえなやまし給ふをも、かたへはめぐましくのみ思ひなり給へるを、おもひのほかかめにめづらしかりし御さとずみのほどにはしも、もてかくさんかたなくあやしき御なやみを、せんかたなく心ひとつに、かなし、いみじときえかへり給ふ。いもせの御心のうち、いづれもいとくるしげなり。さるは、しるべせし宮⁽¹³⁾こどりさへ、このほどしもわづらひて、はかなくなりぬれば、さま

く、いかばかりかはおぼしみだれん。……左大将は、宮³ごどりのあとたえにし後、はるけやるかたなくて、いとあはれと思ひいできこえ給へど……。

（『我身にたどる姫君』巻五 一四八〜一四九頁）

左大将と麗景殿女御は「たえまひさしからず」密会をしていたが、やがて麗景殿女御は左大将に対して「いみじうつれなく」なる。左大将は麗景殿女御を「わすれがたく」思つて苦しみ、麗景殿女御は左大将の子を懐妊して思い悩んでいる。この場面で出てくる「都鳥」は、「このほどもわづらひて、はかなくなりぬれば、「あとたえにし」とあるように、既に亡くなつていららしい。その「都鳥」が亡くなつてしまつたために、左大将と麗景殿女御は「おぼしみだれ」、また、左大将は「はるけやるかた（＝心を晴らす術）」を失つてしまつている。

各注釈書は、②について、次のように記している。

・二人の仲をとりもつた女房。参考「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（伊勢物語・九段。古今・羈旅・在原業平）。上の和歌で「わが思ふ人はありやなしや」と問いかける対象が「都鳥」（ユリカモメ）であることから、「都鳥」は、恋人の安否を問いかける人（仲介者）の意に用いられる。

（徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』三四一頁¹³）

・Ⅱ六段注(9) (①の注を指す。稿者注) 参照。恋の手引きをする女房をいう。

（今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君4』九五頁¹⁴）

・「都鳥」は、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと」（古今集・旅・在原業平）による引歌表現で、離れた男女の仲介をする人、の意。

（片岡利博校訂・訳『中世王朝物語全集21 我身にたどる姫君 下』六一頁¹⁵）

『我身にたどる姫君物語全註解』は、当該場面の「都鳥」を、麗景殿女御と左大将の「仲をとりもつた女房」だと解

している。「しるべせし」都鳥とあるのだから自然に導かれる訳語である。「都鳥」の典拠には、『伊勢物語』第九段の「名にしおはば」の歌を掲げている。しかし、『伊勢物語』の原文に即すと、「都鳥」は、仲を取り持つのではなく、都にいらる人の安否を問う存在であったはずである。この部分の注として最も肝要と思われる点、すなわち『伊勢物語』の原文の「都鳥」と当該場面の「都鳥」との間に意味の違いが生じていることを、この注釈書は指摘していない。また、「恋人の安否を問いかける人（仲介者）」という記述は、『伊勢物語』の「都鳥」が「恋人の安否を問いかける」鳥であるから、『我身にたどる姫君』では「しるべ（仲介）」をした女房が必然的に安否を問う人となる。たしかに同じ「都鳥」なのであるが、「仲介をした」都鳥はあくまで「我身にたどる姫君」固有の文脈なのであり、『伊勢物語』の「わが思ふ人はありやなしや」と問うた都鳥には、仲介者の意味までは見出しがたい。『中世王朝物語全集』が当該場面の「都鳥」の典拠に『伊勢物語』第九段の「名にしおはば」の歌を掲げ、「都鳥」は「離れた男女の仲介をする人」の意だとするものも、これに同じ理由で不十分な注釈である。

今井源衛氏・春秋会の注は、当該場面の「都鳥」を「恋の手引きをする女房」と解している。「しるべせし」とあるからこれも原文通りの訳文である。

このように、注釈書は全て、「都鳥」は『伊勢物語』第九段が典拠だと指摘しているが、「しるべせし宮こどり」とある原文から「都鳥」を恋の仲介をする女房だと読み取っているに過ぎず、『伊勢物語』と当該場面の「都鳥」の意味が異なっていることに触れていないのである。

③の「宮こどり」は、②の「宮こどり」と同一であるため、諸注釈書の記述は②と同様である。

最後の一例は、左大臣が春日大社を参詣をする場面にある。この左大臣は、②・③の「宮こどり」の場面に出てくる左大将と同一人物であり、巻七に「左大将左大臣になり給ひぬ。」（二〇八頁）と昇進したことが記されている。

なが月のころ、左のおとゝかすがにまうで、とりわきのり申給ふ事などやありけむ、神も仏もあやしき御ことのみぞおほかる。

「は、そはらやへたつきりはへだつともたづねててらせ秋の夜の月

(脱カ)

こゝろをそく」と、いとたしかに見たまひければ、うちかへしおほしつくるに、むかしより、きりのへだてもくもりあるべきは、そのかけなど、たづね給ことなどもなかりしかば、いづこばかりかはと、せめてたどりよるにぞ、をのづからあやしきこともおほしめしあはするにや、いみじうおほつかなければ、むかしの宮^④こどりもはかなくなりにしのち、いみじうつれなげなる御心がはりのはしたなさなれば、いひよらんかたなくおほしみだる。

〔我身にたどる姫君〕 卷八 一三四頁

左大臣は、人知れず育てられている自身の子を探すようにとの神託を受け、「あやしきこと」に思い当たる。しかし、「いみじうつれなげなる御心がはり」があまりが悪く、言い寄って確かめる術がない。「いみじうつれなげなる御心がはり」は、②・③の場面で麗景殿女御が左大将に「いみじうつれなく」なったことが示されているので、麗景殿女御に関する記述だとわかる。すなわち左大臣の思い当たった「あやしきこと」とは、麗景殿女御との密通である。そしてこの場面の「宮こどり」には、「はかなくなりにし」と既に亡くなっていることが説明されており、②・③の場面の「このほどもわづらひて、はかなくなりぬれば」・「あとたえにし」と対応する。左大臣（左大将）と麗景殿女御との関係の記述に登場し、とうに亡くなっている④の「宮こどり」は、②・③の「宮こどり」と同一であると判断してよいだろう。④についての注は、この「宮こどり」が②・③の「宮こどり」と同じであるため、諸注釈書の記述は②と同内容に留まっている。

ここまで見てきた『我身にたどる姫君』の「都鳥」を振り返ってみよう。

①の「みやこどり」の場面では、中納言は侍従に音羽の里の姫へ「しるべして」ほしいと、手引きを依頼する歌を詠みかけている。また、本文に「つねにめなれぬる（＝いつも見馴れた）」とあることから、中納言が普段から侍従のもとを訪れてその依頼をしていることもうかがえる。①の「みやこどり」は、中納言が日頃から仲立ちを頼んでいる女房侍従を指している。

②・③の「宮こどり」の場面では、「宮こどり」が亡くなって左大将と麗景殿女御が没交渉に陥ったとあるから、この「宮こどり」は生前に二人の仲を取り持っていた人物である。本文に「しるべせし宮こどり」とあることから、この「宮こどり」が手引きをした人物であることは明らかだろう。この「宮こどり」については具体的な人物名が出ていないが、物語において女房が男女の仲立ちをするというのは一つの典型であるから、②・③の「宮こどり」は、左大将と麗景殿女御の仲立ちをした女房のことだと考えられる。

④の「宮こどり」は、先に述べたように②・③と同一人物である。

『我身にたどる姫君』の「都鳥」は、すべて恋の仲立ちをする人物を指している。①が中納言が音羽の里の姫への仲介を依頼している侍従、②・③・④が左大将（左大臣）と麗景殿女御の仲を取り持った女房という、仲介役を担う別の二人の女房を指していることから、作者が「都鳥」を仲介役の意味として用いているのは明白である。典拠とされる『伊勢物語』第九段の「都鳥」とは、意を異にしているといえよう。『我身にたどる姫君』の作者は「都鳥」を、都を偲ぶ名を持ち、都にいる人の安否を問う存在だという従来通りの理解ではなく、恋の仲立ちをする存在だと理解しているのである。

三

前章で引いた『我身にたどる姫君』の今井源衛・春秋会の①の注には、『とりかへばや』にも『我身にたどる姫君』と同様の「都鳥」の例があるとしていた。『とりかへばや』は平安時代末期に成立したとされる物語で、鎌倉時代中期の成立と目される『我身にたどる姫君』に先行する。

その『とりかへばや』には、「都鳥」の用例が一例確認できる。

(中納言が)うちにまいる給へれば、内侍のかんの君の御かたに、女房などめづらしがりきこえて、日ごろの物語などするついでに、宰相の君といふ人、いかにぞ。さとのしるべにあらぬ身の、つねにうらみらるゝがむつかしさに、ゆづりきこえてし。みやこどりは、あなづらはし。わたくしの心ざしそへられしとにや、此ひごろは、をとなきこそめやすくはべれとこまやかにわらふ。弁の君、その中将は、なやみ給ふことありとこそいふなりしか。げに隙なくゆきあひ、うるさきまでをとづるゝ人の、此日ごろをとなきはむべなりけり、いとおかしかりける事かなと、きゝをどろかれて、うちよりまかで給ふまゝに立より給へれば……。

(『とりかへばや』巻一 三三九頁)¹⁷⁾

久方ぶりに内裏に参上した中納言が、内侍の部屋で女房たちと語らう場面である。女房たちは、近頃姿を見せなくなつた宰相中将のことを話題に出している。その宰相中将とは、「このとの、姫君(＝内侍)、右のおとゞの四の君、とりくゝになだかくいはれ給ふを、いづれをもいかでと思ふ心ふかくて、」(巻一 三三〇頁)と、内侍に懸想をしている人物である。

この場面の「みやこどり」について、『とりかへばや』の諸注釈書は、次のように記している。¹⁸⁾

・恋人の消息を知っている都鳥のような仕事は、他人に譲り申し上げてしまったが、こんな仕事は軽蔑してよい。「名

にし負はばいざ言間はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(伊勢物語。古今集・九・鞆旅)を下に持った表現。

(鈴木弘道著『とりかへばや物語の研究 校注編解題編』四〇頁頭注)⁽¹⁹⁾

・「都鳥」は鳥の名で、「名にし負はばいざ言間はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(伊勢物語)『古今集』鞆旅・在原業平)によって、わが思う人の消息を教えてください、の意に用いた。この侍女は、自分が里のしるべであることをやめて、だれか別人を、仲介役すなわち都鳥としたのである。

(桑原博史全訳注『とりかへばや物語』) 一四七頁)⁽²⁰⁾

・「名にしおはばいざ」とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(伊勢物語。古今集・鞆旅・在原業平)へ都鳥よ、おまえが「都」という名を持っているならば、さあ尋ねてみよう。私の恋しく思っている都の人は、無事に過しているかどうかと。の歌をふまえた表現で、恋人の消息を知らせる仲介役、案内人の意。

(田中新一ほか著『新釈とりかへばや』一〇三頁)⁽²¹⁾

・宰相さまは、「恋の取り持ち女は全く厄介だ。こちらは色々ある上に、召使いにまで思いを懸けられては身がもたない」というおつもりでしょうか。……都鳥は、「名にしおはばいざ」とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(伊勢物語九段。古今集・鞆旅・在原業平)による。

(大槻修ほか校注『新日本古典文学大系 とりかへばや物語』一四〇頁脚注)⁽²²⁾

・『取り持ち役の女性というのも面倒なもの。そんな役目に自分の私的な気持ちまで持ちこまれてはたまらない』とでもおっしゃりたいのでしょうか、……。

(友久武文・西本寮子校訂・訳『中世王朝物語全集12 とりかへばや』四八頁現代語訳)⁽²³⁾

「名にしおはばいざ言間はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(古今集卷九・鞆旅・四一一・在原業平、『伊勢物語』

第九段)を念頭に置いた表現。

(同 九〇頁)

『とりかへばや』の諸注釈書はすべて、当該場面の「都鳥」を恋の仲介役だと解し、その典拠に『伊勢物語』第九段の「名にしおはば」の歌を掲げている。しかし、前章でも述べたように、『伊勢物語』の都鳥は、都にいる人の存否を尋ねる存在であり、仲介役は担っていない。当該場面の「都鳥」は、『伊勢物語』原文の「都鳥」とは意味が異なっているのだが、各注釈書はそのことまでは指摘していない。

さて、『とりかへばや』の本文を見ると、宰相中将の噂話をする女房の台詞には、「みやこどり」の語を含んだ一節の前に「さとのしるべにあらぬ身の、つねにうらみらるゝ」とある。この台詞は、

あまのすむさとのしるべにあらなくに怨みむとのみ人のいふらむ

(『古今和歌集』巻第十四・恋歌四・七二七・題しらず、小野小町)²⁴

の歌をふまえている。「私は漁師の住む里の道案内ではないのに、どうしてあの人は私に、あなたを恨みましょうとばかり言うのだろう」という歌意である。『とりかへばや』の女房はこの歌を引いて、私は「里のしるべ」、つまり内侍のもとへの案内役ではないのに、宰相中将からいつも恨まれるのが煩わしいのでその役目を人に譲ってしまった、と言う。女房のこの発言からは、彼女が宰相中将から内侍のもとへの手引きを頼まれていることがうかがえる。その恋の手引きの話題のなかで「みやこどり」の語が用いられているため、当該場面の「都鳥」は、恋の仲介役を指す可能性が高いと考えられる。

恋の仲立ちをする「都鳥」の用例は、『我身にたどる姫君』だけでなく、『とりかへばや』にも見受けられるのである。しかしながら、中古・中世の「都鳥」の用例は、『伊勢物語』第九段に発する本来的な「都鳥」が主流であり、管見の限りでは、『我身にたどる姫君』と同様の意で「都鳥」を用いている例は、『とりかへばや』に限られる。

四

これまで、「都鳥」について検討してきた。「都鳥」は、『伊勢物語』第九段のすみだ河の場面に登場し、その名から郷愁を誘い、都にいる人の消息を問う存在として従来理解されてきた。ところが、『我身にたどる姫君』の「都鳥」は、四例すべてが恋の仲立ちをする女房のことを指しており、原拠『伊勢物語』との間に意味の違いを生じている。『我身にたどる姫君』の作者は「都鳥」を、『伊勢物語』の原文どおりの一般的な理解ではなく、恋の仲介をする存在として理解しているのである。

「都鳥」が恋の仲介役をするという『我身にたどる姫君』と同様の理解は、管見の限りでは、『とりかへばや』以外には見出すことができない。したがって、この理解は、特異な理解だといえよう。

『我身にたどる姫君』の作者は、「都鳥」を、古来なされてきた一般的な理解ではなく、恋の仲立ちをする存在⁽²⁵⁾だという特殊な理解の基で描いているのである。

注

- (1) 『伊勢物語』の引用は、片桐洋一・福井貞助ほか校注・訳『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年)に拠り、章段と頁数を記した。
- (2) 『伊勢物語惟清抄』の引用は、片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成 第四卷』(笠間書院、二〇〇九年)に拠る。一四頁。なお、『伊勢物語古注釈大成 第四卷』は底本の句読の朱点をそのまま翻刻しているが、本稿では引用に際して、私に句読を判断して句読点に変更した。
- (3) 『伊勢物語古意』の引用は、片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション 第五卷』(和泉書院、二〇〇六年)に拠る。

五一頁。

- (4) 鈴木日出男著『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）、三七頁。
- (5) 前掲注(4)に同じ。
- (6) 堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』（岩波書店、一九九七年）、八九頁脚注。
- (7) 『我身にたどる姫君』の成立年代については、『無名草子』にその名が見えず、『風葉和歌集』には作中歌のうち七首が入集しているため、一二〇〇年頃から一二七一年だとされている。ただし、『我身にたどる姫君』は全八巻から成るが、『風葉和歌集』に入集した七首すべては巻四までの歌であり、巻五以下の歌は入集していない。また、『風葉和歌集』は登場人物が最後に達した官位呼称で詠人を記録するが、『我身にたどる姫君』に関しては、巻四末尾時点での官位呼称で詠人を記している。この二つの観点から、現存する八巻すべてが一二七一年までに成立していたかどうかで説が分かれている。『日本古典文学大辞典』第六巻（岩波書店、一九八五年）、『中世王朝物語・御伽草子事典』（勉誠出版、二〇〇二年）、平林文雄編著『我身にたどる姫君 本文と校異（全）』（笠間書院、一九八四年）、『中世王朝物語全集21』（笠間書院、二〇一〇年）の解題等参照。
- (8) 『我身にたどる姫君』の引用は、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成第七巻』（笠間書院、一九九四年）に拠り、巻数と頁数を記した。以下、同じ。
- (9) 中納言はかつて音羽の里で姫君を見染めており、侍従はその音羽の里の姫に仕えていた。この音羽の里の姫は、実は対の屋の姫と同一人物である。姫君は、中納言の父関白と皇后の宮の密通によって産まれた子であり、不義の子であるために、皇后の宮の計らいによって音羽の里で密かに育てられていた。皇后宮が崩御してからは、実父の関白が姫君を自邸の対の屋に引き取り、侍従も姫君と共に対の屋に移り住んだ。しかし、中納言はそのような背景を知らない。
- (10) 徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』（有精堂、一九八〇年）。
- (11) 今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君2』（桜楓社、一九八三年）。
- (12) 大槻修・大槻福子校訂・訳『中世王朝物語全集20 我身にたどる姫君 上』（笠間書院、二〇〇九年）。

- (13) 前掲注(10)に拠る。
- (14) 今井源衛・春秋会著『我身にたどる姫君4』(桜楓社、一九八三年)。
- (15) 片岡利博校訂・訳『中世王朝物語全集21 我身にたどる姫君 下』(笠間書院、二〇一〇年)。
- (16) 『とりかへばや』には原作本と改作本があり、伝存しているのは改作本のみである。改作本の成立年代は、『無名草子』に「今の世に出できたる」物語として『今とりかへばや』の名が見えていること、一一九三〜一一九六年に成立したと考えられる定家の『物語二百番歌合』には原作本の歌のみが採られていること、一一八三〜一一八六年頃の成立とされる『実家卿集』の「物語の名に寄する恋」の歌に『とりかへばや』の書名を詠み込んだ歌がある(但し、原作本か改作本かは不明)こと、巻四に一一六五年七月二十八日以降に詠まれた二条院中納言典侍の歌を踏まえた表現があること、女東宮の設定に鳥羽皇女暲子の面影があること等の条件から、十二世紀の半ば以降から一二〇〇年の間の、十二世紀最末期だと考えられている。『中世王朝物語・御伽草子事典』(勉誠出版、二〇〇二年)、『新日本古典文学大系26』(岩波書店、一九九二年)の解説、『中世王朝物語全集12』(笠間書院、一九九八年)の解題等参照。
- (17) 『とりかへばや』の引用は、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成第四巻』(笠間書院、一九九一年)に拠り、巻数と頁数を記した。便宜上、鉤括弧を省略した。以下、同じ。
- (18) 『新編日本古典文学全集』は、「いかにぞ」は、「都鳥は」に係る倒置文。」(二二三頁頭注)とした上でこの場面を解釈しており、句読点の位置が不自然で妥当ではないと考えたため、本稿の本文では採り上げなかった。なお、「都鳥」の注には、「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(古今・鞍旅、在原業平、伊勢物語・九段)による。好色として名うての宰相中将を揶揄して称したものの。」(二二三頁頭注)と記している。
- (19) 鈴木弘道著『とりかへばや物語の研究 校注編解題編』(笠間書院、一九七三年)。
- (20) 桑原博史全訳注『とりかへばや物語(一)』(講談社、一九七八年)。
- (21) 田中新一・田中喜美春・森下純昭著『新釈とりかへばや』(風間書房、一九八八年)。
- (22) 大槻修・今井源衛ほか校注『新日本古典文学大系26 堤中納言物語 とりかへばや物語』(岩波書店、一九九二年)。

(23) 友久武文・西本寮子校訂・訳『中世王朝物語全集12 とりかへばや』(笠間書院、一九九八年)。

(24) 『古今和歌集』の引用は、『新編国歌大観』(日本文学WEB図書館)に拠る。

(25) 恋の仲立ちをする都鳥と類似したものととして、大永三年(一五二三)十一月六日に宗印なる人物がおこなった『伊勢物語』の講釈を筆録した『伊勢物語宗印談』に、「錦鳥」が見受けられる。

名にしおは、いさ事とはん都鳥わか思ふ人はあるやなしやと

とは、なにしおは、は、名に、る事ならはと云心也。都鳥と云名に、床しきに、似る事ならはとなり。いさこと、はんは、都の⁽²⁶⁾と事はんと也。都鳥わか思ふ人はありやなしやと、は、二条の後、大裏にありやなしやと、は、やとなり。名にしおは、は、今々にも名に似る事ならはとよむにや。引歌、

名にしおは、逢坂山のさねかつら人にしられてくるよしも哉

是もあふ坂と云名に似る事ならは、……みやこ鳥とは、此うへにひそかにしせつ侍りしは、清和の太子、ある時せり河へ行幸なさる、時、中将、ひかし山にこもりしか、太子の行幸を忍ひてみるに、彼君の殊勝をみて、あれ誰そと御供の人々にとひければ、是こそ都とりと云にや。中将、何事にととひければ、清和の太子なれば、清和より後には都をとる君なれば、都とりとは云にや。船こそつてなきにけりとは、……船と云字、君にす、むと云

とそ。にしきとりとは、『源氏物語』には恋の文つかひのおとこ女を云にや。引歌、

三とせまてかひすたてたるにしき鳥わかおもふことのつかひよくせよ

とそ。もみち鳥は鹿を云にや。引歌、

今はは^{〔万葉〕}や龍田の山のもみち鳥ぬれくわたるやまと河かも

とそ。

〔伊勢物語宗印談〕第九段 一九七〜一九八頁)

鳥の名前は異なるが、「錦鳥」は恋の仲介をする人物を指すと説かれており、『我身にたどる姫君』の「都鳥」と意味が共通している。「錦鳥」は、『我身にたどる姫君』の「都鳥」と関係があるのかもしれない。なお、「錦鳥」は、『伊勢物語』の古注釈書及び、『伊勢物語』第九段のすみだ河の条と同内容を収めた『古今和歌集』の古注釈書のうち、稿者が確認

した限りでは『伊勢物語宗印談』にしか見出すことができない。しかし、連歌資料の『梵灯庵袖下集』、『宗祇袖下』、『連歌秘伝抄』、『匠材集』、『産衣』に、錦鳥は恋の仲立ちをする女房だという記述を見ることができる。『我身にたどる姫君』に描かれた恋の仲立ちをする「都鳥」は、連歌の世界との関わりを予想させるが、稿者はこのことについて不案内であるため、言及はこの程度に留めておく。『伊勢物語宗印談』の引用は、片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成 第四卷』（笠間書院、二〇〇九年）に拠り、章段と頁数を記した。

*本稿では引用に際して、適宜、ルビを省略し、傍線を付した。また、場面把握の一助のため、必要に応じて（ ）内に語句を補った。

（本学大学院博士前期課程）